

～～～立春祭と水の祭祀～～～

白川は水の祭祀ともよく言われますが、それは中臣家、そしてその後の白川家に伝わる中臣の寿詞に現れており、中でも「顕(うつ)し國の水に天つ水を加へて奉(たてまつ)らむ」の件の部分は、白川祭祀の根幹に関わる部分でもあります。ここで言う「顕し國の水」とは、大地の恵みによって得られたこの世の水のことを指し、「天つ水」とは言霊が吹き込まれた、つまり言霊によって神々の働きが加わった水ということが出来ます。

白川学館では民としての立場をわきまえつつ、公への貢献としての祭祀を執り行ってまいりましたが、人類にとってなくてはならないこの水というものを、伝統の護持と新文化創造のために、この祝殿で祭祀として今までも執り扱ってまいりました。

令和五年白川学館立春祭では、二十四節気のはじまりとなるこの祭祀において、水の器である私たちの体内を巡る「顕し國の水」を祓詞によって本来の姿「天つ水」に転換し、祭祀で献饌される「別天水」との産霊(ムスビ)の中で「天の八井」を得、世の平安清明への礎をあらたにしたいと思えます。

※「別天水」=七澤賢治元代表が長い研究を経て、最先端の科学と技術を使って情報エネルギーを転写、内包することに成功した水のこと。

~~~~~